

東日本家族応援プロジェクト in 福島 2021 開催しました！

人間科学研究科教授 村本邦子

12月3日から5日（漫画展は1日から7日）、最終回となる福島でのプロジェクトは、制約もありながら現地でのプロジェクトを無事終了することができました。今年は、毎年会場に行っていた「こむこむ」が使用できず、福島、白河、いわきの三拠点での活動に加え、前後、途中で、参加メンバーがグループに分かれての自主的フィールドワークを行い、盛りだくさんの内容となりました。それぞれが経験したことを共有すると、多様で多面的な福島の今が見えてきます。個別の経験については、それぞれが報告していますので、ここでは、簡単な概要を報告するにとどめます。

それぞれに自主的フィールドワークを実施した後、福島市の市民活動交流センターで、初年度よりお世話になっている「NPO法人ビーンズふくしま」の理事中鉢博之さんのアレンジで、「福島の今、そしてこれから」というテーマで、「一般社団法人ふくしま連携復興センター」のみなさんのお話を聞きました。「ふくしま連携復興センター」は、福島大学災害復興研究所や県内のNPOとともに、2011年7月に設立され、12月に法人化されました。様々な支援のコーディネートやネットワークづくり、情報発信、事業連携・協働推進をサポートする中間支援組織で、「東日本大震災・福島第一原子力発電所事故が投げかけた課題を教訓として、その課題解決に取り組み多様な主体が連携を深化させ、人口減少・経済格差・社会的孤立の拡大防止に取り組む『共に助け合う市民社会・ふくしま』を目指」しているそうです。ふくしま連携復興センター（2021）『FUKUSHIMAの10年—震災・原発事故に向き合った市民団体50の物語』という本を頂きましたが、福島の復興に向けさまざまなNPOがさまざまな取り組みをしていることがわかりました。4名のスタッフたちの被災時の経験やどのような思いで現在働いているかという話も聞かせて頂けたことが興味深く、若い力を頼もしく感じました。



その後のビーズふくしまの運営する「みんなの家」の訪問は、人数制限があったため、今回、初めての訪問となる院生 5 名に譲り、私たちは、毎年お世話になり、昨年はコロナ禍でオンラインとなったため、漫画展会場も引き受けて頂いた極久里コーヒーを訪問しました。極久里コーヒーは、コロナ禍においても休まず営業を続け、売上が落ち込むこともなかったそうです。どこへも出かけられない、人とも会えない時、人のぬくもりを感じながら、静かに美味しいコーヒーを飲む時間がどれほど人々を慰めてきたことだろうかと思いました。マスターが、「復興と言っても、元の村に戻ることはなくて、何かまったく新しい町ができるということなんだな」とポツリと言いました。私は、前日、飯館村を訪れ、今は人に貸してパン屋さんとなっている極久里コーヒー店へも行ってきました。景色を含め、お店の雰囲気もあまりに素敵だけに、市澤さんご夫婦が、どれほど寂しく残念な思いをされていることだろうかと思っていたところでした。十年もの年月が経てば、どこであっても町が同じであることはないのかもしれませんが、自分たちの営みや思いとはかけ離れたところで起きた変化です。



それから翌日のプログラムに向けて白河へと移動したが、院生たちは、意欲的に、夜のフィールドワークもしていたようです。

12月4日（土）は、白河市で、毎年プログラム協力頂いている小磯さんの属する「NPO 法人しらかわ市民活動支援会」と一緒に市民交流センター「マイタウン白河」にてプログラムを開催しました。漫画トーク、カプラに挑戦しよう、クリスマスカレンダーを作ろうです。カレンダーづくりでは、いつものように、子どもたちが工夫を凝らしてユニークなカレンダーを作り上げていました。「時間がかかったけどたのしかった（5歳女）」「たくさんの人にぼくのお手伝いをしてもらってありがとうございました。お菓子をたくさんはったり、飾りをつけたりしてたのしかったです。シールもあってよかったです（9歳男）」などかわいいアンケートも書いてくれました。

今回は、コミュニティ・カフェ EMANON の協力を得て、高校生のボランティアがお手伝いしてくれたのですが、プログラム終了後、EMANON で交流会を持ちました。



終了後、慌ただしく、マイクロバスでいわきに移動しました。古滝屋で夕食を取りながら交流会。その夜は温泉に入り、翌朝は、考証館を見学し、Fスタディツアーに出発しました。檜葉の宝鏡寺にある伝言館を訪れ、浪江や富岡を案内して頂きました。沿岸部が初めての院生たちの衝撃は大きかったようです。昼過ぎに解散し、また各々でフィールドワークを続け、いわき震災伝承記念館やいわき市ライブいわきミュウじあむ「3.11 いわきの東日本大震災展」などを訪れ、夜遅くに帰路につきました。

個人的には、十月、これまでプロジェクトでもお世話になってきた山元町やまもと民話の会の庄司アイさんと飯館村の長谷川健一さんのお二人の訃報を聞き、とても悲しく残念な思いで過ごしていましたが、前日、山元町中浜小学校遺構で紙芝居「中浜小学校物語」を読むアイさんと映像で再会することができ、また、今回は飯館村の長谷川さん宅を弔問することができたので、少し気持ちの整理ができました。十年続けるということはこういうことなのだとしみじみ思いました。それでも、当時小さかった子どもたちが今では高校生になってプロジェクトを手伝ってくれたり、当時、高校生や大学生だった若者がコミュニティの復興のために働いている姿に触れ、世代交代ということも感じました。気づいてみれば、自分だって還暦を迎え、まもなく引退です。まだもうしばらくは頑張れるにせよ、後に続く院生たちの未来に希望を託したいと思いました。このところ、若い人たちに東北の話をする機会が増え、東北のみなさんから頂いた宝物のような話を少しでもお裾分けしたいと心がけていますが、しっかり受け取ってもらえる手ごたえも感じています。

白河（福島）

団士郎

2021年になって、新しい場所で、初めての人も多いマンガ展&漫画トーク。

マイタウン白河玄関直ぐの目につきやすい場所でのパネル、掛軸の展示。ソファもあってくつろげる展示会場になっている。とくに掛軸二作品（軸四本）の展示壁面は、このために設えたようなピッタリサイズ。

漫画トークは二階会議室で実施。他行事進行のスケジュールの関係で、出入りがはげしかった分、少々落ち着かなかったが、多くの方達が聞いて下さった初めての会になった。

初めての会場・スタッフで、初めての人の多い聴衆で、一年以上のコロナ禍を挟んで、久しぶりの空気がどこかにあった。ITOYOKADO が撤退した建物をリノベーションした町の中心にある施設は気持ちいい空間にデザインされている。

東北の福島ではなく、「FUKUSHIMA」問題は何も片付いていない。そう考えると、ここ白河で今、第1回がスタートしたと位置づけられたら、東日本家族応援プロジェクトの第二シーズンとして展開を考えられるだろう。

珍しいことに地元の高校生ボランティアが手伝いをしてくれた。当然、こちらと比べたら超若いのだけど、子どもの感じがしなかった。大人に混ざって興味深そうに話に参加している。自分がかつてこういう高校生では全くなかったことを思い出して不思議な感じがした。

いつの時代にもいろんな子がいるから、一律であるはずはないのだが、それでもこの子達のしっかりと質問したり応答したりするのを見ながら、時代は変わってきたのかなぁと思ったりもした。

地域社会とかネットワークとか、安易に言葉は口にするが、こういう子達が一年ずつ地元で歳を重ねていくのに、マンガ展で伴走するのは良いかもしれないと思った。彼らの数年は私のそれとはまったく比重が異なる。そんな時間を過ごして若者が、白河を地元として世界中のどこで活動するようになって、それは若者流出、過疎化とは違うモノだろう。

故郷のために何か行動を起こした人になっておくことのもたらすものは大きいのだろうなぁと思っていた。



むつ、多賀城のプロジェクトに参加してから福島プロジェクトにも加わった。事前調査を行ってから現地に入らせて頂いた。東日本大震災が起きた時、私は大学2年生で友達と春休みに沖縄に旅行に行った帰りの日だった。東北で地震があったらしいという情報が入るが、飛行機は飛び、大阪に着いてから津波で各地が大きな被害を受けたことを知った。その後、原発事故や放射線被害を巡って情報が錯綜した状態であったことを覚えている。私の周りでも、被災地へボランティアに行った人は多く、原発に反対するデモに参加している人もいた。当時の私は、ニュースに心を痛めながらも、何も行動することなく、ただの傍観者であった。自分に出来ることなどないのではという気持ちがあったし、恐らくその時の自分には、被害を受けた人たちと関わるエネルギーが無かった。でも、何もできなかったことが心残りで、立命館大学院への進学を考えていた時にこのプロジェクトを知って、是非参加したいと思って入学した。このプロジェクトは、10年越しではあるが、大災害を前に立ち止まってしまった私の背中を少し押して、東北と関わる機会を与えてくれた。福島の事前調査をして、放射能と放射線の違いや、原発を巡る当時の状況の一端と、その後被ばくのリスクがあるため故郷を追われた人、安全な場所へ避難している人、故郷へ戻ることを選択した人など、様々な選択をして生きてこられた方々のことを知った。知らないことばかりで、これまで心残りがありながらも、知るためのアクションを取ってこなかったことを恥じた。

大阪の中学校で実習を終えた後、新幹線で新白河駅に移動する。夜の20時に到着しホテルを目指して夜道を歩く。初めての福島は、明かりが少なく人も少ない印象。ホテルに荷物を置いてから、一人で円盤餃子を食べに駅の反対側を目指す。円盤餃子は皮がモチモチ、パリパリして美味しかった。餃子がメインの居酒屋のカウンター席に座っていたが、地元のお客さん達がほろ酔い気分で柔らかいイントネーション(福島弁?)で話す声がバックミュージックのように聞こえて、私も良い気持ちになる。帰り道、ほろ酔い気分でホテルに向かう夜道を覆うように星が瞬いている。手が届きそうな星を見上げて、なんて綺麗なんだろう、福島の人達にとって、星は生活の一部なのだ、と感動する。明日からのプロジェクトもきっと上手くいく、と考えているうちにホテルに到着した。

2日目はマイタウン白河で漫画トーク、クリスマスカレンダーのワークショップ、カプラで遊んでみようなど、盛りだくさんの1日。私はクリスマスカレンダー担当だったので、飾りに使う材料を小分けにする作業をしてから、本番を迎えた。兄弟で参加してくれた親子の近くで、6歳の男の子がカレンダーを作るサポートにつく。伸び伸びと木を描き、一生懸命ハサミで切って、苦手なノリと格闘する彼を、お母さんは辛抱強く、そして温かく見守っていた。その子はとても自由に創意工夫をし、試行錯誤を重ねていた。お母さんも私も、彼の手足となって、必要な時に少しだけサポートした。彼がとても集中して作品と向き合っていること、自分の好きなように作り上げる自由を楽しんでいることを私は隣で感じていた。完成した時、彼はとても満足そうだった。作り上げた作品は私には輝いて見えた。このプロジェクトを成功させるために、マイタウン白河のスタッフの方々と、白河高校の学生達が、一緒に心をつなぎ組みで下さった。初めて会うにも関わらず、ワークショップの時間や空間には人の温かさが溢れていた。プロジェクトに協力して下さった方々の温かさ、きめ細やかな気遣いを至る所で感じ、皆で良い時間を作り上げ、過ごすことが出来た。

白河を後にして、いわき湯本温泉古滝屋へ移動する。とても立派な旅館だ。夕食を頂き、温泉に浸かって1日を終えた。露天風呂では、満点の星空に包まれて、心も体もリラックスする時間を過ごした。3日

目には、古滝屋のご主人の里見さんが、原子力災害の被災地を巡る、Fスタディツアーを実施して下さった。夜ノ森駅の近くで下車し、帰還困難区域を歩く。住宅はフェンスで囲まれており、警備員が立っている。放射線量の値が高いため人が住むことが出来ないまま 10 年が経った。かつて人が住んでいた家々のシャッターは降ろされ、窓は閉められ、街に人の気配はなくシンと静まり返っている。ここで生活していた方々は、今、何を思い、どこで生活をされているのだろうか。日差しを受けてボロボロになったカーテン、置き去りにされた車やバイクを眺めながら、失われた暮らしを思い、胸が痛む。里見さんのお話はどれもインパクトがあった。特に印象に残ったのは、宿坊体験で食事を頂く際に、「この食べ物を食べるだけの価値がある人間か」と問われたエピソードだ。命を頂いて、私たちは自分の生を支えている。でも、私たちは生産現場で何が起きているかも、生産者の苦労も知らずに、全てのサービスを金で買って消費する社会に生活している。福島で起きたことも同じで、原発事故があった際に放射線被害にあったのは、原発に隣接する地域だった。原発は遠く離れた都会で消費されるための電気エネルギーを作り出していた。原発から距離のある消費者は、原発事故のダメージを受けなかった。東日本大震災は過去の出来事として、復興は終了したものとして、忘れられていく。でも、放射性物質は、事故の後、現在も、そしてこれからも、ずっと街と自然を汚染し続ける。

新幹線で大阪に戻ったのは、夜の 10 時過ぎだった。新大阪駅は電光掲示板、電気パネルで覆われて、建物の中に入ると夜であることが分からないような明るさだ。東北の薄暗さにいつの間にか慣れていて私には、ピカピカと輝く大阪の夜が、目と心に痛い。大阪の夜は、馬鹿みたいに明るいと感じ、福島とのギャップに怒りが湧く。頭の中で、里見さんの言葉が形を変えて何度も問いかける。「お前は電気を使うに値する存在なのか？」スーツケースを引きながら、鉛のように重い心を抱えて、大阪で生活をしている私も同罪であることを知る。私は毎日、生産の苦労を知らずに、この簡便な生活を享受している。この生活が奪ったもの、傷つけているもの、傷つけるかもしれないものに思いを寄せることなど、これまで無かった。クリーンで快適な生活を金で買っているが、何を犠牲にしてこの生活は、そして社会は成り立っているのだろうか。キラキラと輝くネオンの白々しさを知ってしまった私は、今後どのように生きていけばいいのか。全く分からない。驚くべきことに、大阪の電光的な明るさへのショックは翌日には和らぎ、3 日後には慣れてしまった。距離と時間を置いてしまえば、福島の人たちの痛みをいつでも忘れてしまうことのできる自分に恐ろしさを感じる。知ってしまった事実には、向き合う責任が私にはある。

「線を引く」

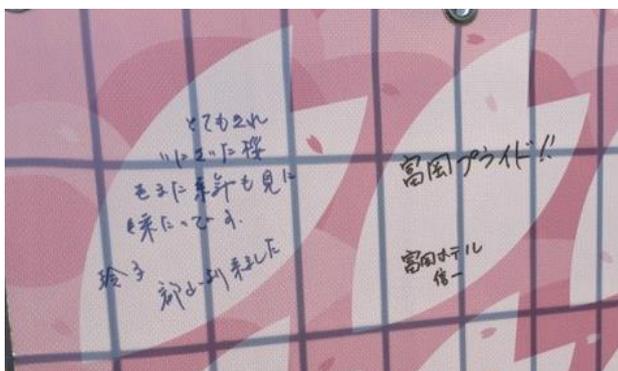
対人援助学領域 M1 小笹大道

18 歳以下に 10 万円。ただし、世帯主収入 960 万円以内。行政によるコロナ禍の支援・施策の 1 つが最近、大きな話題となった。全員対象ができない場合、どこかで「線を引く」ことは致し方ないと思っていた。ただ、今回の福島で、その線を引くことに対する大きな違和感と心のざわつき、そしてこみあげてくるものがあった。

双葉郡富岡町 JR 夜ノ森駅。この線路を挟んだ東側は今も帰還困難区域とされる一方、西側は帰還困難区域解除となり、人々が生活をしている。この線路を境として別世界が両側に存在する。古滝屋の里見さんに案内いただきながら、帰還困難区域を歩いた。家や広場、道路は柵が設けられ、時折警備員の方が立

っておられる。その中を消防や警察車両がたまに行き来する。あえて集団から離れると、音のない世界があった。家があるのに、公園があるのに、まったく音がしない。かつて住んでおられたであろう家は主を失い、まさにゴーストタウンのような雰囲気が漂う。里見さんは「夜に窓ガラスを割って泥棒が入るんですよ」と言われる。荒んだ街のただならぬ雰囲気がゾクゾクさせた。その最中、住民の方々へのメッセージが目飛び込んできた。その1つにあった「富岡プライド」という文字。〇〇プライドという言葉は、至る所で聞く。どちらかという自分たちを鼓舞する形で使われることも多いだろう。でも、今回の富岡プライドという言葉に、どこか空虚感の漂う、それでもこの街をなんとかしたいという、いつもとは違った感情を抱いた。

そんな気持ちを抱いて辿り着いたのが夜ノ森駅。ここで衝撃の事実と出会う。駅の反対側には普通の生活があった。普通と書くと語弊があるかもしれないが、人が住んでいて生活を営んでいる光景があったことをここでは普通と表現しておく。たった線路一本を挟んだ差。この差にどんな差があるのだろうか。この数メートルで何が大きく変わるのだろうか。どこかで線を引かなければならなかったのだろうか、実際にその大きな線を見て、その光景に涙が溢れてきた。元の場所に戻れない方の気持ち、きっとここにはあったであろう子どもたちの笑い声。そんなことを思うと、不条理な世界に心がザワザワした。そして奇しくも小中学生が共同で作成した作品は、避難区域の方に飾られていた。





← 帰還困難解除区域

帰還困難区域 →

初日にいった BLT カフェ。ここは「お互い様の町、ふくしま」を目指して活動された吉成洋拍さんの作られた店である。ここには pay forward という仕組みがある。恩は返すものではなく「送る」もの。次に来る人のために、先に誰かが使うチケットの支払いを済ませる。このチケットで、無料で食事をすることもできる。

表には、棚と冷蔵庫。ここに余ったものなどを置き、必要とする誰かが持っていく。絵本に「どうぞのいす」というのがあるが、まさにそれが現実化したもの。

そして BLT カフェには障がいを持った方が働いているが、それを微塵も感じさせない。そんな工夫が施されている。



学校では特別支援学級がどんどん増えている。でもそれはそのシステム自体が分断を生んでしまっているのかもしれないと感じさせるものだった。そもそも健常者と障がい者に、線は必要なのだろうか。ほんとうはわかる必要のないことではないのか。でも、世の中のシステムにはめ込むときに、その都合で線が引かれてしまっているのかもしれない。本当は、配慮や支援という意味で、ゆるい点線のようなものだったのが、いつのまにかシステムを回すためのくっきりとした実線で描かれ、それが人々を分断させてしまっているのではないのだろうか。そして、部落差別も、人種差別も、戦争も、みんなそういった線が引き起こしているのだと今更ながらに気が付いた。今まではそれらの差別がダメなことを頭で分かっていた。でも、夜ノ森駅の線路を見たときの感情は、線を引くことが差別の種になる可能性があるのだという重みを教えてくれた。そういえば、伝言館には原発のことも、戦争のことも、暴力のことも表現されていた。根本は同じ。人間のエゴが生み出したもの。これらは福島原発だけの話ではなく、自分たちの生活が生み出している。そんなことを教えてくれた夜ノ森駅の線路であった。そして、世の中の分断をなくそうとするとき、NPOなどの市民活動がその接着剤の役割をしていることもよくわかった。

京都に戻って、村上春樹氏のカタルーニャ国際賞でのスピーチ原文を読んだ。そこには「効率」と「無常」を対比させながら、日本人の精神性を説いていた。まさに今回の福島を締めくくるに、見事な文章であった。線を引くことの重み、一度できてしまった溝の接着剤。生きていく中で、大切にしたいキーワードが見つかった。

生まれ変わって

臨床心理学領域 M1 大谷通高

2021年12月4日(土)の10時30分からマイタウン白河にて、団士郎先生の漫画トーク展が開催され、私はそのスタッフとして参加した。イベントが始まって部屋には30人ほどの参加者がおり、空席はどこかを探すほどに盛況だった(途中で大学生の参加者7~8名が抜けてしまった。。。)。

講義後半、先生の漫画の読み聞かせのあとに15分程ペアになって参加者同士で感想を言い合う機会が設けられた。私がペアとなる人を探していると、ぽつんと一番前の席に座っている60歳前後の男性がおられた。よく見れば男性の参加者は、彼と、私だけである。

そそくさと彼の隣に座り、「よろしくお願いします」と挨拶を済ませ、お互いが漫画の感想を言い合うにも、照れもあってか言葉も詰まり、なんとも微妙な空気のまま始まった。

漫画は、父親が子供たちの部屋の施錠扉を取り外したエピソードであった。

「どうでしたか?」と私が尋ねると、「私は家族に嫌われてますから・・・」と開口一番に、そう話された。「息子たちは、私が家に帰ると部屋に籠りましたし、話もしませんでした」、言葉少なげにそう話して、漫画に出てきた父親と自分とを重ね合せているようだった。

一度目のワークが終わり、再び先生の漫画読み聞かせ。今度も父親の話である。休日に中学生の息子をドライブに連れだすエピソードだ。息子が公共の場所で町の人と一緒にバスケットボールをする、それを車から眺めている父親、そうした何気ない親子の休日と、そこから息子の転校や進路の話へと物語が進む。読み聞かせが終わると、また先ほどと同じペアで10分程話し合う機会が設けられた。

私はまた彼の隣に座る。「どうでしたか?」と聞くと、すぐに「あなたは?」と語気強く返してこられた。父親が息子のために転校先の学校に掛け合いバスケ部に入れるよう働きかけたこと、そこが印象に

残りました、と私は彼に感想を言った。

すると彼は「わたしは家族と仲が悪いから」と、息子たちはもう家を出て今は妻と二人暮らしでほとんど会話もない、それは息子たちともそう、私だけが家族と仲良くない、そんな話をポツポツと、詰まりながら話された。

「いまから、仲良くしてみるのはいかがでしょうか？」と出過ぎたことが口をついたが、すぐさま彼は「来世でそうしてみます」と返してきた。

驚いた。その大げさな表現に、「「来世」ですか・・・？今生でもいいと思いますけど・・・」と私は戸惑いながら言葉を返すも、そこで時間が終了した。妙に名残惜しい気がしたが「ありがとうございました」と別れて席に戻る。そして団先生の話がすすみ、イベントは盛況のままに終わった。

イベントの片付けを終えて、お昼休みの時間。

スタッフにはお弁当が用意されていたが、私はこっそり会場を抜け出し蕎麦屋を探していた。「月見」と名に付く料理に関心があり、関心を共有する学友に福島の月見そばの画像を送りつけようと思っていた。すると運よく会場近くに老舗の蕎麦屋があった。

暖簾をくぐり店内に入ると、驚くことに、偶然にも、入り口すぐのカウンターに先ほどペアになった彼が一人で蕎麦をすすっていた。

店員に彼の隣の席を勧められ、軽く挨拶を交わす。「さきほどは、どうも」と私、「みんなと一緒にじゃなくていいんですか？」とすこし目を大きくしてハニカミながら驚く彼。今度は笑顔を交じりあわせて、蕎麦をすすりながら会話した。なんとも不思議な距離感だ。

そのうちに彼は「昨年、心臓が止まったんですよ。だから一度死んだんです、わたし」と出し抜けに言った。「えっ！？大変でしたね！？今は大丈夫なんですか？」と驚く私をよそに、彼はすこし歯を見せて笑いながら「AEDで、なんとか生き返りました」と。それ以降、仕事を辞めていること、実は白河に住んでいないこと、妻の職場が白河にありここに来たこと、昨日に団先生の漫画を見つけ読んだこと、「結婚」という物語が良かったこと、そんな話を朗らかに笑いながら語られた。

そして息子さんたちとの思い出話をしてくれた。自分は仕事ばかりしていた、これでもスポーツ少年団のスキーの監督をしていたんですよ、息子たちも団に入っていた、身内だから依怙贔屓できなくて冷たく厳しく接したこと、下の子には希望する地元の高校ではなく進学校に行かせたこと、文化部だった長男が大学生のときスキー部に入部したこと、自分と息子さんたちとの繋がりを過去から探るように語り出してくれた。

話を聞いていて、掘り起こせば息子さんたちとの結びつきが出てくるように感じ、「今からでも仲良くしてみてもいいような気が・・・」と話してみた。「いやいや、無理無理」と彼は照れくさそうに首を振った。

蕎麦も食べ終わり、彼が先に、私が後に会計を済ませると、彼は店先で私を待っていてくれた。「ありがとうございました」と挨拶の合間、彼は私の目を見て「生まれ変わってやってみます」と、「生まれ変わった気で」と、すこしだけ語気強く静かに伝えてくれた。私はその言葉に嬉しく感じながら「お体に気をつけてください」とこたえ、お互いに会釈をしてその場を去った。

会場に戻り、用意されていたお弁当を美味しく頬張りながら、「来世」よりはいいか、とぼんやり考えていたら、ふっと気づいた。そうか、彼はワークの時に「来世」と口にしたことが、心臓が止まり一度死んだことを蕎麦屋で話してくれたことが、「来世」や「生まれ変わって」が一度死んだ彼にとって大げさ

ではないんだ。

「来世」から「生まれ変わって」に変わるにあたり、彼のなかに、いろんな想いや経験がいくつも折り重なり、その意味が書き換えられたのかもしれない。そのきっかけが、この日の漫画トークにはあったのだ。



「東日本家族応援プロジェクト 2021 in 福島」に参加しての事後レポート

対人援助学領域 M1 郷間 彰

今回のプロジェクトに参加したかったのは、原発事故後10年の月日がたち、福島がどんな姿に向かっているのか、この目で見て感じ、人々の思いを聞きたかった。福島市内在住の50代のお父さんの話には驚愕した。「原発事故直後に、福島市内の水をもらうために当時8歳の娘を外に連れていった。後でわかった話だが、高濃度の放射能の線量を浴びさせてしまったことが今でも悔やまれる。甲状腺がんは30年後しかわからない。娘が38歳になるころ。娘に申し訳ない気持ちでいっぱい。国や東電はスピーディーの情報を持っていて彼らだけが逃げた。県からも何も知らされなかったことに強い憤りを感じている。」私が10年前に仕事で被災者支援のため二本松市に避難していた浪江町住民の地元に戻れない「憤り」と同じ感情をここ福島市内で聞かされた。また、古滝屋当主里見喜生さんが原発事故の被災地を案内する語り部ツアーでの出来事。檜葉町宝鏡寺の伝承館の展示パネルから「政府が原発を福島県に誘致し、地元自治体は原子力明るい未来のエネルギー宣言をし、事故は起こらない安全神話のもと住民も安心し、そして原発の爆発事故が起きた。政府は事故直後から最悪のシナリオを想定していたという新聞報道。原発の恐怖と危険性を訴え、二度と過ちをおかしてはならない。」と怒りのメッセージを受けた。その後富岡町夜ノ森地区を訪問、初めて誰も住んでいない街に足を踏み入れた。里見さんが「毎日、新聞に県内の死者数が掲載され、震災で亡くなった方1600人は変わらないが、原発事故関連で亡くなる方は今も増え続け2300人もいる」と。今の福島の現実を知って感じて考えるこの思い未来へ強く訴えておられる姿に、怒りと決意と覚悟を感じた。

もちろん福島の明るく元気な話題もあった。福島を「世界一同情された街」から「世界一感謝にあふれ

た街」にしたいとの思いで始めた「福島ひまわり里親プロジェクト」の取り組み、BLT カフェにおける障害者雇用や子ども食堂の取り組み。「お互い様の街ふくしまを目指したい」とのことで、「お互いさまチケット」や「みんなの食糧庫」。困っている人たちを笑顔に、そして当たり前で暮していける取り組みに深く感銘を受けた。また、地域おこしの担い手や復興支援員が県外から 188 人と県内の多くの市町村で定住定着されてきたこと、NPO の数が原発事故前の 2 倍増など、県内外からの新しい応援する力が着実に増えている。

最後に福島の子どもたちとの交流。私はカプラを知らなかったが、白河高校生はじめ大人が真剣に積み上げていく緊張感と幼い子どもが無邪気に崩していく光景が交差して楽しく感じた。今回親子参加のクリスマスイベントと聞いていたことから、私もトナカイの着ぐるみに徹した。高校生 6 人は「居場所コミュニティ・カフェ EMANON」の紹介でこのイベントを知ってボランティアに初めて参加したとのこと。みんな楽しそうで積極的で純粋な高校生たちだった。

今回参加して、10 年たっても原発事故への人々の「怒り」を感じた。私には福島の人々に「寄り添う」という言葉では安易に言い表せない。人生それぞれに原発への思いがあるだろう。私は、今後、一方的に福島を思い自分なりの行動を続けていきたい。今回のプログラムに参加させていただいたことに本当に感謝申し上げます。ありがとうございました。

東日本大震災家族応援プロジェクト in 福島

対人援助学領域 M1 佐野ちひろ

【1 日目】

○BLT CAFE

CAFÉ では HCW（ハンディキャップワーカー）を雇用して（障害者雇用制度ではなく）、ハンバーガーを中心とした CAFÉ を運営しており、同時に月に 1 回、子ども食堂としてお持ち帰りのハンバーガーをされていました。子ども食堂の対象は限定せず、希望者は誰でも、無料で配布をされていました。対象を限定しない理由として、本当に利用してほしい人が利用できなくなる状況がある（例えば、生活困窮家庭と限定すると、そのことが周囲にわかってしまう、子どもに隠していたことが知られてしまうなど）ため、どんな人にも無料で配布しているとのことであった。利用する人は震災後、もしくはコロナ禍後に生活に困窮している家庭、ひとり親家庭、普段から仕事と育児に追われている家庭など、様々な理由があり、ひとくくりにはできないと話されていた。また、子ども食堂として実施していた頃は、迎えるスタッフは全員仮装し、もてなすことで、明るい雰囲気ができるよう工夫されていた。

店の前には野菜の無人販売所のような「OTAGAISAMA みんなの食糧庫」という棚があり、ここでは自由に食材を置き、自由に持ち帰ることができる。一定のルールはあるが、「おたがいさま」の気持ちを福島に普及させたいとのことで実施している。

HCW とは、「障がいを持っていても楽しく努力しながら働いている」人たちのことです。健常者と障がい者が一緒に働く職場づくりを目指し、障がい者の得意なところを仕事にできるようにしている。実際に働いているところを見せていただきましたが、健常者と障がい者が共に一生懸命役割を持って意欲的に働く姿がありました。障がい者の作業所もありつつ、障がい者本人が選択できる環境を

作るがよいのではないかと話されていました。



○福島の今、そしてこれから

NPO 法人ビーンズふくしま兼一般社団法人ふくしま連携復興センター（以下、復興センター）のスタッフの方に復興支援センターのことについてお話をしていただいた。被災者支援コーディネート事業、福島県県外避難者への相談・交流・説明会事業、福島県復興支援専門員設置業務委託事業の3事業を中心に、福島県にある社会資源をつなぐことや、お互いの事業を知り合うことなどでより機能的に被災者支援ができるような事業や全国26か所に生活再建拠点を設置し、県外避難者が県内へ戻る時の相談や支援、また県外で住む人への相談・支援等をおこなっている。避難せざるを得なかった人、自主避難した人など総数は把握しきれず、それぞれの避難者をどう扱うのかなど課題が多いようであった。また復興支援専門員を配置し、復興支援員や地域おこし協力隊の活動の支援を行なっている。県外への避難者が多く、福島の人口は減少しているため、県外からの移住者を募り、地域になじんで土着できるよう支援する取り組みも行われているが、地域になじむには様々な課題もあり一長一短のようであった。



○子育て支援センター「みんなの家」、復興交流拠点「みんなの家セカンド」訪問

市の子育て支援センターとして委託を受けて活動している。子育てしているママたちが多く利用しているが、今は避難していて戻ってきた人よりも、県外から夫が原発の仕事で転勤してきた親子が4割ほどいるとのことでした。県外からきた方は放射能のことを不安に思っていて、お互いに疑問を出し合い参加者同士で情報共有をしている。何が正しいかどうかではなく、お互いの意見を尊重し否定をしないようにしている。県内の野菜は現在でも全て放射能測定をして出荷されているが、県内の野菜は絶対に食べない人、検査しているものしか食べない人など様々であるということが印象的でした。放射能の不安はまだ続いていると実感せざるをえなかった。「みんなの家」は一軒家であり、親

子が遊びやすく、ママが子供の姿を見やすいように広いスペースになっていて、非常に安心感に包まれるような空間でした。



復興交流拠点「みんなの家セカンド」も同じように温かみのある空間で、大人の部活が非常に興味深いものでした。部活で撮影された写真が掲示されており、また写真をもとにしたカレンダーの制作もされていた。他に「一貫張り」という大小様々な大きさ、形の作品作りもあり、文化祭でも販売されるそうです。

○がんピアネットふくしま Sさんとの交流会

Sさんは飯坂温泉近くで震災被害者でもありながら、沿岸部で原発事故後に避難して来られた方の支援にあたられたそうだ。原発の放射能の正確な情報はなく、他県から来る原子力や放射能の専門家と言われる人の多くは「(放射能汚染について) 大丈夫だ」とばかりいうが、何の根拠もなく、後から外に出ていた時に放射能が降っていたことがわかったこともあった。飯坂温泉に避難してきた方々は後日、避難困難区域になる地域の人々で、すぐに自宅に戻れると思いつの身著のまま避難してきた方が多く、そのまま自宅に帰れなくなった。

避難所の支援について、印象的だったのは行政は支援物資が届いても避難者全員に平等にゆきわたらないものは配布せず、処分することも多かったそうです。

コロナ禍でもあったが、専門家と言われる人々の発言の責任の所在はどこにあるのか、何を根拠に住民の方に「大丈夫」といったのか、そのことによって放射能の汚染被害にあった人達への対応はどう考えているのか、非常に憤りを感じた。

【2日目】マイタウン白河にて東日本大震災家族応援プロジェクトの開催

前回の宮古市では、プロジェクトの開催がされなかったため、非常に楽しみな企画でした。「カブラに挑戦しよう」「団士郎漫画トーク」「団士郎漫画展」「クリスマスカレンダー」を実施した。私はカブラの担当で、共催者の方3名、院生3人、高校生6人でまずは「ナイアガラの滝」の作成に取り掛かった。まったく初顔合わせの住んでいる地域も年齢も立場も違うメンバーで、短時間の打合せのみで、時間通りに途中大きく壊れることもなく、ある意味、とても息の合った行動で完成させることができました。それを壊す際には、とてもきれいに流れるような「ナイアガラの滝」になり、何か不思議な気分でした。



○コミュニティカフェ「EMANON」

EMANONは高校生対象のコミュニティカフェで、無料で自習をしたり、放課後活動に利用したり、ひとりで過ごしたり…とさまざまな活動ができるカフェです。室長の青砥さんに高校生が自由に使える放課後カフェを作ったことについて思いを聞いてみた。福島には大学が少なく、ご自身が高校生の頃、大学生が周りにおらず、大学のことについて身近に触れる機会がなかったことからこのカフェを作ったとのことであった。スタッフは現役の大学生であったり、OBやOG、地域の大人もサポーターとして関わっている。確かにボランティアで参加していた高校生は白河高校という進学校で、進学先の大学は県内では福島大学の名前が出てきたぐらいで、あとは専門学校に進学する様子であった。原発事故後であることもあり、県外に進学することはさらにハードルが上がっているのかもしれないと感じた。



【3日目】

○古滝屋 「Fスタディツアー」

原発事故で大きな被害を受けた双葉郡富岡町に、古滝屋のオーナーの里見さんがツアーコンダクターになりマイクロバスで案内していただいた。一番印象的だったのは里見さんの語りだ。穏やかでやさしい口調、引き込まれる語りの中に芯のある語調、強く熱い思いを感じた。里見さんは「原発事故」と表現せずに「原子力災害」と表現していた。震災や原発事故を経験し、人の命や日常生活への影響はもちろん旅館の経営などにも影響が及んだことなどがこの言葉の表現になっているのだろうか。道中、原発誘致のときの話やいわき市の震災被害、原子力災害の放射能の影響や被害状況、帰還困難区域の説明などを丁寧にしてくださった。原発の誘致の際には国を挙げてポスターなど、「原発が安全である」ことを強調した宣伝が多く、子ども達の通う学校でも原発が安全であると教育されていたそうだ。この話を聞いたとき、戦時中、子ども達に「国のため、天皇のため」と洗脳された教育が行われていたことと重なった。国策を押し進めるときの「教育」という手段は怖いものだと感じた。

原発事故を起こした福島第1原子力発電所は近寄れないため、福島第2原子力発電所が見えるところに案内してもらった。とても天候がよく美しい海と浜辺、波乗りに来ているサーファーのいる海辺から見る原発は異様だった。要塞のようにそびえ立ち、SF映画のCG画像のように、周囲の景観から浮いていた。こんなところに建造することが本当に必要だったのだろうか。街から来た私達にはわからない、地元の人にとって本当に必要な原発だったのだろうか。見ていた誰からも言葉がなかった。

避難困難区域の富岡町は言葉を失う光景だった。11年前に放射能が拡散され、着の身着のまま避難した人々がなくなった街。大きな道路の脇には地震により崩れたり、破損した店舗がそのまま放置されていた。家屋はぼろぼろになりながらも残り、周囲の草木は伸び放題で、駐車場にある車は11年前の原型をほぼどめたままで、11年の時間の経過を不思議と感ぜない廃墟となった街。庭先には除染されものを集めたフレコンバックが積んだままになっていた。住宅街では通過できる道路以外、各家の周囲は柵やバリケードで囲われ、人が入れない状態であった。本当に今まで見たことのない光景だった。最寄りの「夜の森駅」では駅舎と線路を挟んで避難困難区域と居住可能区域に分かれていた。この差は何なんだろう。一方は廃墟、10数メートル離れて一方は新しい住宅が立ち、住民が住んでいる。さらに衝撃的だったのは駅舎の近くにある線量計が他県から汚染されていない土の上に配置されているということであった。駅舎の他の場所で里見さんが持参した線量計で測定すると数値が異なった。数値は測定する機器や測定のタイミング、風の動きで変動のあるものではあると聞いたがこの数値の差をどう考えたらよいのだろうか。

最も印象的だったのは、津波が起これ人命救助が必要な地域の放射線量が高く、救助に入れず、その地域の人々が「餓死」で亡くなったということである。原子力災害は人が人として助けあうことさえも阻むこと、救助に入れず悔しい思いをした人、そして救助されずに亡くなった人たちの無念を思うと心が痛い。再び古滝屋を、里見さんを、避難困難区域を訪ねてみたいと思った。それが証人であること、伝承することにつながっていくのではないだろうか。



○いわき震災伝承未来館他

「いわき震災伝承記念館」は海辺の近くにあり、防潮堤の脇にある。震災当時の様子が映像や写真で見ることができた。放射線の汚染の他、津波の被害も大きかった様子がよく分かった。宮城県宮古市のフィールドワークで多くの防潮堤をみてきたが、ここも同じく海岸沿いのあらゆるところに防潮堤ができていた。宮古ほどは高いものではなかったが、堤防上になった斜面には「防災緑地」と言われる防潮林が8種類ほど植林されていた。沿岸部は住居もあまりなく、亡くなった人々の名前が入った慰霊碑が町の集会所や公園とともに立っていた。防潮堤の向こう側にある海は穏やかでとても美しかった。しかしこの海が人々や街を根こそぎ飲み込んだこともまた事実だ。相反する自然の姿に吐息

がもれた。



【まとめ】

今回のプロジェクトやフィールドワークで印象に残ったことは3つある。1つはNPO 法人の活動が活発であることにより震災後の復興が支えられていること、2つめは震災時、子どもだった子達が大人になり、親の世代になったとき何を考え、何を思うのだろうか。3つめは、福島震災は奥が深く復興の渦中であり、終わりが見えない状況にあると感じた。NPO 法人の活動は非常に柔軟で必要なことがすぐに実現できるメリットがあるが、一方で支援金に頼らず「持続可能な活動」にすることが今後必要になってくるのではないかと考えた。

福島から帰ってきてから、早稲田大学で行われたシンポジウム「復興の人間科学 2021 福島原発事故 10 年の経験から学ぶ」の動画配信を見た。2つ目の疑問には、この動画がとても参考になった。私が思っていた震災当時の子ども達の周りで起こっていたこと、そのことによる影響など、また大人になった今、伝えたいことがとてもよくわかった。大人になった子ども達が語ることやこの先、年齢を重ねて多くの経験を通して感じ考えることは発信していくことが大事だと思った。3つめは今回のフィールドワークではほんの一部分しか知ることができていないと感じるため、再度福島を訪ねてみたいと思った。先生たちがおっしゃったように福島はまだこの先、「証人」となる必要性があり、また「伝承」していく必要性を感じた。

東日本家族応援プロジェクト in 福島 2021 に参加して

対人援助学領域 M2 北口 文

はじめに

私にとっては今回初めての東北、初めての福島だった。東日本家族応援プロジェクトの中で福島を選んだのは、福島について学びたい気持ちと、ホームページを見て子ども達とのクリスマスカレンダー作りがとても楽しそうで是非参加してみたいと思ったからだった。

震災と津波と原発事故という未曾有の複合災害の被害を受けた福島については、マスコミで報道される範囲での知識しかなかった。今回プロジェクトに参加させていただくにあたって、複合災害がもたらした被害と、福島の現在の状況、そして親子に与えた影響等について調べた。参考文献を読むことで初めて、人々の壮絶な経験や失ったものの大きさに圧倒され、今もなお続く苦難の大きさなどを知り衝撃を受けた。

そして、今回フィールドワークに参加して実際に見聞きしてさらに多くの現実を学んだ。以下に現地でのフィールドワークの概略と福島での学びについて報告する。

2021.12.3 福島

BLT カフェ

BLT カフェは、吉成洋拍さん達が、地域の人々が「恩返し」でつながる拠点にしたいと、福島市に始めたユニークなお店だ。現在は子ども食堂事業も行われている。外観も店内も個性的でカジュアルながら、外国のお店の様な雰囲気もあるおしゃれで、個性と理念と夢の詰まった店構えだった。この店で印象に残ったのは、ペイフォワードのシステムとみんなの食糧庫と障害者雇用だ。みんなの食糧庫とは、家にある不用品や食料品を持ち寄って入れておき、欲しい人は自由に持って帰れるようにと、店の前に置かれているスチール棚と小さな冷蔵庫の事だ。誰でも自由に持って来て、自由に持っていける。これも「恩返し」の発想から生まれたそうである。

私達はハンバーガーをいただき、支払いとしてペイフォワードのカードを購入し、購入したカードにメッセージを書き入り口のキーホルダーに掲示しておいた。次に来た人で、無料で食事をしたい人は、そのカードを使って食事をする事ができる。これがペイフォワードのシステムだ。ハンバーガーのおいしさと、障がいのある人もない人も共に働くスタッフさん達の笑顔と、テーブルに置かれていた「お互い様の街ふくしま」というキャッチコピーとでおもてなしを受け、心が温くなる時間だった。型にはまらない自由な発想から生まれたアイデアを実現し、生き生きと働かされているスタッフさん達から学ぶ事は多かった。

ふくしま連携復興センター

みんなの家 ・ 復興交流拠点みんなの家セカンド

ふくしま連携復興センターで中鉢さんや職員さんらのお話をお伺いした後、レトロな雰囲気のいい電車（飯坂線）に乗り NPO 法人ビーンズふくしまが運営するみんなの家と復興交流拠点みんなの家セカンドに向かった。中鉢さんやスタッフの皆さんが迎えて下さり、お茶とお菓子までご用意していただきお話をお伺いした。どちらも民家を利用したのアットホームな雰囲気で、みんなの家セカンドでは、～福島で安心して暮らす事ができる一助と「食の安全」「心のケア」を通して人と地域が笑顔でつながり合う場～として避難や帰還を問わず、参加者のそれぞれの選択と思いを互いに受け止め、子どもから若者、お年寄りまで緩やかにつながるための交流会を開催している。また県外に避難をしている親のための交流会や個別相談活動や、ふくしまでの子育てに不安を抱える母親のための「ままカフェ」を県内各地で開催しそれぞれの思いや悩みを受け止めている。

避難先から戻ってきた人達は、安心して戻ってくるわけではない。心配だが戻らざるを得ないママもいる。そうしたニーズに答えるために、福島市以外でも県内 7 か所（郡山、いわき、白河、南相馬、二本松、双葉郡〈浪江、富岡〉）等にアウトリーチもしている。浪江、富岡町ではままカフェは大盛況で、廃炉作業に携わる夫と共に大阪等から移住して来たものの、この町で子ども育てていいの？と悩むママ達の相談にのったり、病院の情報を提供したりしている。夫の仕事で移住してから、富岡町にネイルサロンを開業したママもいるらしい。復興支援住宅の団地に出向いての料理教室の開催などもある。

復興支援住宅にはお年寄りが多く取り残され、会話をする相手もおらず孤立化しており、訪問すると、人と会話をするのが久しぶり、という人もいるとの事。行政ではカバーしきれない課題に対して、NPO の良さを生かして、柔軟に、丁寧に取組まれているスタッフの方々の熱意が伝わって来た。また「大人の部活」など、大人達もつながり合い前を向いて歩いている姿を感じる事ができた。そうした大人の前向

きな笑顔は、こども達にも伝わり、こども達をもエンパワーするであろうと感じた。

がんピアネットふくしま理事長とその友人2人@円盤餃子の店

大の餃子好きなので円盤餃子にはとても期待していた。そして期待通りにおいしい餃子をたくさんいただけた。

がんピアネットの理事長は2010年からリレーフォーライフの実行に携わり、2011年の震災以後は、たくさんのがん患者の相談にのってきた。震災直後には自ら被災しながらも受け入れ側として、旅館に避難してきていた人達に、好きな物を持って行ってください、と物資の支援を5カ月ぐらい行った。浜通りから避難してきていた人達は、皆すぐに帰れると思っていたので、サンダルで何も持たずに避難してきていた。そのため多くの物資が必要だった。現在はがん患者サロンを県内12か所に開いている。

原発事故以前から「原発は絶対安全だ」とコマーシャルなどで思い込まされてきていて、事故直後もラジオで「大丈夫です」「大丈夫です」と繰り返されていた話、危険とは知らずに、原発事故後に妊婦の娘に山菜を食べさせてしまった、と泣いて後悔していた母親の話など、胸が痛むであろう当時の苦悩や、今でも抱える罪悪感のお話等をしてくださった。

福島の人々の懐の広さに感銘を受け、お土産のお菓子まで一人ひとり用意して下さるお気遣いと、いろいろなお話をしてくださった事に、感謝の気持ちで一杯だった。

2021.12.4 白河

おひさまひろばとの共催で「マイタウン白河」においてプログラム

「マイタウン白河」内にある「おひさまひろば」は、NPO法人しらかわ市民活動支援会が市から委託され運営している。子育て支援や情報交換の場として、親子で遊べるスペースの中で親子の交流や、子育ての相談ができ、ひろばには、保育士をはじめ、子育て研修会で学んだサポーターらが活動している。お誕生会や季節のイベント、歯科衛生士や助産師による相談事業、親子向けのセミナー等も行っている。

今回はそのおひさまひろばにご協力いただき、団士郎先生の漫画トーク、カプラに挑戦、クリスマスカレンダー作りのイベントを行った。私はクリスマスカレンダー作りの担当をさせていただいた。9組の親子が参加してくださり、こども13名、親11名の参加となり、おひさま広場のスタッフさんや、白河高校2年の生徒さん3名もボランティアとして参加され和やかに行われた。私がサポートしていた、弟さんとお母さんと来た小3の男の子は、カレンダーが完成すると「今日はありがとうございます」としっかりお礼を言ってくれて、驚きと嬉しさを感じた。感想アンケートに、お菓子里にシールを貼るのが楽しかったです、と書いてくれていた。現地の支援者やボランティアの方達との協働という貴重な体験ができ、現地の親子との触れ合いがとても楽しい時間であった。

その後近くのコミュニティーカフェ EMANON での交流反省会を行った。そこでも、震災時6歳であった高校生や、おひさまひろばや EMANON のスタッフさんとの世代を超えた交流の中で、被災者として、支援者として、こどもとしての経験のお話から多くの学びができた。

2021.12.5 いわき市

古滝屋スタディツアー

古滝屋館主の里見さんのガイドを受けながら双葉郡を中心に回った。

1. 原子力災害考証館 ・ 宝鏡寺伝言館

原子力災害考証館は原発事故を住民目線で考えるという里見さんの思いで、古滝屋に 2021.3.17 開館した。入口を入るとすぐに、他の資料館では目にする事のない原発事故に関する裁判の資料や新聞、事故後の浪江の写真などが展示されていた。その中に震災による津波で行方不明になった小1 女兒の遺品と、父親の手記を見つけた。事前調査で読んだ書籍のなかに紹介されていた、津波で次女と父と妻を失った木村紀夫さんによって書かれたのものであった。津波で行方不明になった 3 人を、木村さんは夜を徹して探したがみつからず、原発が危機的な状況に陥ったため避難を強いられた。1 週間後に避難先から戻って 3 人を捜索しようとしたが、原発の 30 キロ手前の道で警備員に止められ街に近づけなかった。「俺は今でも 3 人を見殺しにしたと思っています」と本の中で語っていた事を思い出し胸が痛くなった。

その後檜葉町にあるお寺で、避難者訴訟の原告団長でもある住職の早川篤雄さんと立命館大学名誉教授の安齋育郎先生が設置された伝言館へ向かった。入口に、核兵器廃絶と原発ゼロをめざす「非核の火」と「原発・悔恨伝言の碑」があった。伝言館の中の展示物もどれも興味深く、どのように国や知事が原子力発電を推進してきたか、人々に「安全神話」で洗脳していったかがわかる新聞記事やポスター、東電が作ったこども向けの原子力に関する教材など興味深い展示が並んでいた。住民達は、はるか前から津波による事故の危険を予測していた事を示す資料もあった。

2. 富岡町・夜ノ森駅周辺

福島でみた光景の中で、印象深かった光景は、吾妻山、綺麗な海と空、自然豊かな風土、いわきで見た満天の星空、そして富岡町と夜ノ森駅周辺の光景だ。

新しく整備されて綺麗に整った富岡町駅舎と、青い空と陽光に光る海、という美しく自然豊かな風景の中にありながら、音が全くなく静まり返り、人の生活の営みの気配もなく、人が全くいない周辺の光景に、失われたものの大きさを感じた。駅舎にある線量計が理由を物語っているようで、海岸の遠くの方には廃炉作業が 30~40 年では終わらない事態に陥っていると言われていた福島第一原発が見えた。海岸を歩いている時に里見さんが「この辺は海の水がすごく綺麗なんです」と言われた。実際にとっても綺麗な海だったが、政府、東電が汚染処理水の海洋放出を決定し、放出がはじまれば 30 年は続く事を思い出し、切なくなった。

帰還困難区域の写真は事前学習で何度も目にしていたが、実際に光景を目の当たりにした衝撃は大きかった。福島で出会った人達も「異次元」「別世界」と言っていたように、そのエリアだけ静まり返り 11 年前から時間が止まっていた。そこで生活を営んでいた痕跡が確かに残っているのに、もちろん人影は全くなく、荒れ果てていて廃墟と化し、原発事故がふるさとや生業、人々の生活の営み、家族など様々な物を奪った事実を再確認させられた。傷つけられた土地、美しい自然、人々のあたりまえの日常を思い胸が締めつけられた。

また、線路を挟んで駅の出入り口の違いで、帰還困難区域と人々が生活している区域が分断されているという異様な光景は、理不尽さと違和感に満ちていた。

プロジェクトに参加して

福島から東京を経由して帰路についた。経由地である大都会東京のネオンに、圧倒されるような妙な違和感を持った。あのネオンの電力の一部は、さっき見てきた、元は田んぼだったが、放射能に汚染され田んぼとしては使えなくなった土地に設置された、ソーラーパネルからもきてるんだ、と思うと複雑な気持ちになった。

福島の人々から学んだ事

今回出会った福島の人々からは、都市部で生活をしていると感じる事が少ない「人情」を感じ、そこに懐の広さとたくましさを感じた。特に夜の交流会などでは、こちらからあえて質問しなくても、色々な胸中を本音も交えてお話し下さったように思う。

今回のツアーで交流させていただいたのは、苦悩を強いられる体験を負わされながらも、信念を持ちながら活動している NPO の方々が多かった事であろうが、「家族応援プロジェクト」として行って、元気づけられたのは自分の方だった。

一方、一見適応的に生きてるように見える人々からも、過去の災禍による、終わらない現実をまだ突き付けられながら、怒りや最悪感や葛藤を抱え続けて生きておられる実情も垣間見られた。福島でお会いした人々は、逆境による困難を通してこれまで以上に強くなり、人生についてより深く考える事ができるようになる強さをもっているのではないか。それは今では苦悩や葛藤がないという意味ではなく、今でも怒りや不安や葛藤、罪悪感、後悔など様々な苦悩や困難を抱えながらも、前に進んでいく強さであるのではないだろうか。前を向こうとするきっかけは個々により様々であると思われるが、古滝屋の里見さんは、歴史があるから乗り越える事が出来た、と語っていた。先祖や父親を思い「父親ならどうしただろう」と自問しながら苦難を乗り越えてきた、と。

「ふるさととは3つあった方がいい、できるだけたくさんあるといい」という里見さんの言葉は、ふるさとを奪われたたくさんの人々を目の当たりにし、ご自身もたくさんの喪失を体験されたからこそ出てくる、重みのある言葉だと感じた。

終わらない被災の時間

今回のプロジェクトでは、フィールドワークや、プログラム、現地の人々の声から、10年たった今でも続いている問題、10年たった今だからこそ起こっている問題など、福島の人々が抱える多くの問題、日本という国の課題など様々な事を学んだ。原発の廃炉は、30年から40年では終わらない事態に陥っており、たまった汚染水や汚染土の処理も福島に問題を押し付ける形で進んでいる。水や大地が汚されていき福島の人々の故郷を破壊し奪っていつている。心の復興の面でも10年たっても震災関連死者数は増え続けている。甲状腺がんの問題もある。「こどもの甲状腺に嚢胞がある」、と話されていた福島でお会いした方の心配そうな顔が忘れられない。

人々の記憶から震災のことや原発のことが忘れ去られていき、ニュースや新聞でも取り上げられることが減っていつているからこそ、今回聴かせていただいた福島の人々の言葉、そのような状態を生き抜く福島の人々の姿を長く伝え続け、さらに福島に関心を持ち続け、学び続けていく中で自分にできる事は何かを問うていきたい。

最後に、現地でお世話になり、様々なお話を聴かせてくださった福島の皆様や、仲間として沢山助けをいただき、楽しい時間を共にしていただいた院生チームの皆様へ感謝したい。そして様々な困難を乗り越え、プロジェクトを11年にもわたり続けてこられ、このような貴重な学びの機会を与えてくださった先生方に深く感謝し敬意を表したい。



東日本・家族応援プロジェクト in 福島

対人援助学領域 M2 前田留里

昨年福島プロジェクトに参加しましたがオンラインでの開催であったため、現地にてフィールドワークをしたいと、今年も福島プロジェクトに参加しました。

1日目、福島駅に到着すると院生の友人が迎えに来てくださっていてBLTカフェへ。こども食堂や支え合う活動の内容をお聞きするだけでなく、私自身も昼食をご馳走になり、誰かのために食事チケットを買って贈るという支え合い（恩送り）を体験し、心が温かくなりました。

その後、先生方と合流し（一社）ふくしま連携復興センターの方から、復興に向けて住民と全国からの支援の力を合わせて、新しい福島が再生している現状をお聞きしました。そこに至るには、いち早く動いた市民活動など民間の力が行政を変える大きな力やエネルギーになっていて、「自分たちでできる行動を起こす、声を上げること」が、いかに大事かわかりました。

その後、福島で暮らす親子が気軽に立ち寄れる「みんなの家ふくしま」、大人の部活などがある交流の場「みんなの家セカンド」を訪問しました。感染対策を行いながら笑顔で迎え入れてくださるスタッフの様子や場の雰囲気、祖母の家に来た時のような、包み込んでくれる大らかさと暖かさを感じ、参加しやすい環境に配慮されていることがわかりました。

夜は、NPO 法人がんピアネットふくしまの鈴木理事長、飯塚町商工会女性部の島田さん、薬剤師の松木さんにお話を聞かせていただきながら、名物の円盤餃子をいただく。

放射能は安全で大丈夫だと聞かされていて知らずに被曝していたこと、支援物資が適切に配られなかったことなど当時の情報や混乱の様子を語っていただきました。また、震災から10年目前に起こった2月の大きな余震を経験した子どもから「地震はもういやだ」と、大きく揺れたマンションから一軒家に引っ越されたとの話から、子どもにとって震災の恐怖はずっと存在していることがわかり、胸が痛くなりました。

2日目はマイタウン白河で、団先生の漫画トークを担当。漫画トークでは、「原因を探す時はうまくいっ

ていない時」で、「自分」「他人」「状況」のうち「自分」を変えることが一番簡単なこととお話され、納得。自分の家族や生活を振り返るきっかけになりました。

その後の交流会会場である EMANON では「高校生に夢や未来の楽しさを伝えたい」という取り組みが心強く、そんな支援をする若者の今こそ素晴らしく、白河の未来も明るいと感じました。

その後、いわき市湯本へ移動し、震災前から経営しているというスナックで、ママから当時のお話をお聞きすることができました。

震災直後は原発作業員や帰還困難区域の方がたくさん湯本温泉に滞在し、毎晩お店は賑わったが、ストレスも大きかったのだろう、客同士の喧嘩が多々あったという。

今はどちらもいなくなり、コロナと原発の影響で観光客も少なく寂しい町になったので、また来てほしいと別れを惜しむ言葉で締め括られました。

3日目は朝から古滝屋のFスタディーツアーに参加しました。楢葉町の細い山道を車で登ると宝鏡寺境内に「伝言館」がありました。住職が賠償金などの私費を投じて建設したという木造2層建てには、所狭しと資料がたくさん展示されていました。中には福島県が震災前に発行していた防災カレンダーがいくつもあり、原発避難の情報が細かく記載されていました。このような情報が県民にいきわたり、防災訓練を定期的に行っていたら違う結果になったのではないかと思いましたが、「原発は安全だ」と常に言われていたため、原子力の防災意識が低かったそうで、安全だという刷り込みは危険だと感じました。

夜ノ森駅周辺では車から降り、徒歩で散策。駅の東出口と西出口で人が住む地域と住めない地域に分断されていました。同じ駅でも復興側が報道され、反対側は報道されない。

駅前ターミナルの中心には立派な線量計が建っていて低い値を示していましたが、少し離れた草むらでは、手持ちの線量計で高い数値が示されました。1箇所の数値が周辺全体の数値ではなく、場所によってはまだまだ高い場所があるということを目の当たりにしました。

その後、海岸から福島第2原発が見える場所に立ち、大きな対比を目撃しました。

海と原発＝自然と人工物。どちらも暴走すると人間の力など到底及ばない巨大なエネルギーであり脅威。波の音に飲み込まれそうになり、私にはとても恐ろしい光景でした。

帰りの車窓からは山に囲まれた平野に大量に設置された太陽光パネルの海を見ました。自然豊かな山の中に人工物の海。今なお、福島には大自然の中に巨大な人工物が同居させられていることが残念でなりません。

午後は湯本駅前の老舗饅頭屋で土産物を探しながら福島に来た目的を話すと、店主が原発内の見学ツアーに参加された時の話をしてくれました。

ツアーに参加するには事前の申込が必要で、見学前には近くの施設で厳重な準備や指示があったこと、敷地内は汚染水のタンクだらけであったことなど教えて下さった。それから、原発作業員が命を削って事故の処理をしてくれていることへの感謝とともに、「福島を忘れてほしくない、まだ終わってないんだよ」と、重い言葉を受け取りました。

「復興」という言葉は過去を忘れる怖さがあり、「教訓」にするためには現在進行形の問題として、一人一人が自分事としてできる行動をしなければならない。団先生のお話にあった他人や状況を変えようとする前に、自分の行動を変えるという言葉がここでも思い出されました。福島では今も苦しんでおら

れる方がいる一方、復興に向けて活動する団体や暖かい人々の存在を知ることができ、どちらも語り伝えていかなければと思っています。

「東日本・家族応援プロジェクト in 福島 2021」に参加して

博士後期課程 河野暁子

今年の福島プロジェクトでは、一日早く現地に入り、フィールドワークを開始した。12月2日は、まず宮城県の山元町歴史民俗資料館、山元町震災遺構の中浜小学校を訪れた。民俗資料館では、山元町の古代からの歴史が分かりやすく展示されていた。中浜小学校では、小学校の近くにある坂元中学校の元校長先生たちがガイドをされていて、一つ一つの展示について、来館者に問いかけるように案内をしてくださった。震災当日に避難した屋上の倉庫がそのままになっており、その場に身を置くことで、津波の怖さや過酷な非難を目の当たりにした。また、今年亡くなられたやまもと民話の会の庄司アイさんが、当時の様子を紙芝居で語る映像も見ることができた。その後、富岡町のとみおかアーカイブ・ミュージアム、ふたばいんふお、檜葉町のならば CANvas と、震災と原発事故の伝承施設を続けて回った。前二施設は原発事故を扱っていたが、ならば CANvas は伝承施設に登録されていることが不思議なほど、震災や原発事故に関する展示がほとんどなかった。

12月3日の午前中は飯舘村を訪れ、2019年のプロジェクトでお世話になった故長谷川健一さんのお宅を弔問した。翌日がちょうど四十九日にあたるとのことであった。ご遺族からお話をうかがい、長谷川さんのご自宅前の道路を挟んで積まれているフレコンバッグの山を見て、どれほど無念だっただろうかと言葉を失った。午後からは福島市に入り、ビーンズふくしまの中鉢さんやふくしま連携復興センターの方々から、福島の現状についてお話をうかがった。さまざまな背景を持つスタッフが集まり、福島の今とこれからを支えていくのだと感じた。それから、極久里コーヒーを訪ねた。昨年プロジェクト外で訪れていたので、1年ぶりの訪問になる。店内にはお客さんがけっこう入っており、新型コロナウイルスによる影響は、意外にもそれほどなかったとのことであった。

翌12月4日は、マイタウン白河でおひさまひろばさんと一緒にプログラムを開催した。カプラをつくろう、団先生の漫画トーク、クリスマスカレンダーづくり等、にぎやかで楽しい一日となった。クリスマスカレンダーづくりでは、はじめはやや緊張した面持ちだった親子が、カラフルな飾りをどんなふうにつりーへ飾ろうかと、あれこれ考えながらカレンダーを仕上げていく様子が、とても楽しそうであった。地元の高校生やコミュニティ・カフェの方々との交流も、新鮮な時間であった。

12月5日の最終日は、いわき湯本温泉古滝屋のオーナー里見さんが主催するスタディツアーに参加した。訪れた檜葉町の宝鏡寺にある伝言館では、原発を核と位置づけ、核兵器や戦争を糾弾し、平和を問う中で、原発反対の姿勢を強く打ち出していた。非常に見ごたえのある伝承施設だと思った。さらに富岡町を訪れた。夜ノ森駅は東口が帰還困難区域に指定され、道路や家の前は柵で覆われていた一方で、西口は人が暮らしていた。駅構内には放射線量が表示されており、見えない放射線に注意しながら暮らしていることがうかがえた。事故から10年が経ち、人が住めなくなり荒れてしまった家や土地を見ると、原発事故は二度と起こしてはならないと思うし、原発そのものについても疑問を持つ。来年には、夜ノ森駅東口も帰還困難区域の指定が解除されるとのことであったが、全ての土地の除染が完璧に行なわれることはない、駅近くの草むらの放射線量から分かる。第二原発が近くに見える海岸ではサーフィンをする

人たちがいて、なんとも不思議な光景に見えた。スタディツアーから戻り、帰路につく前の短い時間で、いわき震災伝承みらい館、いわき市ライブいわきミュウじあむ「3.11 いわきの東日本大震災展」を訪れた。どちらの施設も、地震と津波だけではなく原発事故についても扱っていた。

2018年に本プロジェクトに参加した時、福島に関心を持ち続けることを決意し、毎年福島へ通ってきた。福島を訪れるたび、やはり実際にこの地に立ち、この地を歩き、この地で生きる人たちと対話し、感じる大切だと思う。今回は、中通りと浜通り、浜通りにおいても人が暮らしている地域と暮らせない地域、それぞれの伝承施設等、さまざまな福島を見てきた。原発事故によってたくさんの分断が起き、それを乗り越えていくためには、いったいどうしたらよいのだろうか、福島県外に住む私にできることは何だろうか、ずっと考えをめぐらせている。スタディツアーで里見さんが、「ここで写真を撮り、ぜひ帰ってから周りに伝えてください」とおっしゃっていた。福島の外に住む者が、原発事故を福島だけの問題にとどめず、ともに考えていけるように、プロジェクトで学んだことを周りに伝えていこうと思う。

最後に、今回の福島プロジェクトでお世話になりましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。



福島の現地に立って感じ考えたこと

対人援助学領域修了生 NPO 法人家族・子育てを応援する会代表 新谷真貴子

8回目の福島の震災プロジェクト。昨年のリモートでのプロジェクトも多くのことを学びましたが、今年現地を訪れて感じるが多かったと思います。

今年の参加者とのプログラムも、運営・準備を綿密にしてくださっていたので、参加者・スタッフが共に楽しみ盛況に終わったと思います。カプラのナイアガラは、毎年お世話になってきた「わんぱーく」の小磯さんがとても盛り上げてくださって、地元のご家族と一緒に、崩れ落ちる音に歓声が上がり圧巻でした。クリスマスカレンダー作りでは、それぞれの親子の関わりが見られ、子どもたちがわくわくした顔でクリスマスカレンダーを作って、いろいろなお話をしてくれました。村本先生始め平田さん、「わんぱーく」のスタッフ、院生、高校生たちが、親子に喜んでいただくという一心でとてもチームワークがよかったですと思いました。私自身もとても楽しめました。参加された保護者の感想では、子どもへの発見を見つけたものもありました。

家族漫画展には、「胸に迫るものがありました。なにげに立ち寄ったのですが、今後の自分の生き方を

考えさせられます」という感想があり、団先生の漫画トークでは、「子どものためにマイタウンへ来ましたが、自分のための良い時間となりました。」という感想もあり、ふとした出会いでこのような思いを持ってくださることに、やはり団先生のトークや家族漫画には、伝えるメッセージ性があると思いつくづきます。来春は、私たちの会が、奈良県広陵町で第6回の家族漫画展と団先生の講演会を開催します。また、いい出会いの場をつくれるようにと願っています。団先生に継続して講演会に来ていただいていることや家族漫画展開催に協力してくださっている平田さんに感謝します。

今回のプロジェクトでは、私は別行動で、双葉町の「東日本大震災・原子力災害伝承館」にレンタカーで運転して行きました。福島的高速道路には空間放射線量が大きく表示され、途中の帰還困難区域に入ると、廃屋が立ち並び、家々を閉ざすバリケードがより痛々しい姿を感じました。しかし、伝承館の周りの町は、きれいに整地され、別空間になっていました。大きく立派な施設で、バスが何台も駐車場に並んでいました。

施設内に足を踏み入れると、証言映像と原発事故の記録が詳細に展示され、原発事故についての説明の中に「想定外のことでなく、人災であった」と書いてあった言葉が印象に残っています。避難先が何度も変わった住民の大変さは想像を超えていました。また、子どもの健康診断、除染、風評、福島県が今どのようにこの長期化する災害の課題に向き合っていくか、厳しい問題を投げかけていました。そして、改めて、福島が震災前にどんなに豊かな土地で、人が集い伝統や産物が脈々と引き継がれていたかを痛感しました。残念に思います。逆境を乗り越え新しい産業に挑戦する姿も知りました。

子どもへの健康被害についての健康診断が行われていることは書いてありましたが、その結果の詳細の展示はありませんでした。その結果を専門家や行政、とりわけ保護者はどう考えているのか知りたかったです。また、「子どもを屋外で遊ばせたくないか」という保護者のアンケート調査も原発事故後数回実施され、「遊ばせたくない」の比率は年々減ってきていますが、近年でも他府県に比べると高い数値だと思いました。その親の思いをもう少し掘り下げて具体的に伝えてほしいと思います。県のホームページには、県民健康調査課が、震災時におおむね18歳以下だった福島県民を対象に甲状腺超音波検査を実施した数値を公表していました。ただ、この数値をどう分析して、どのように考えればいいのか、分かりません。子育てをされている保護者にとって、これが正しい情報提供なのだろうか、と疑問を持ちました。

今回の震災プロジェクトの会場となったマイタウン白河の地域子育て支援拠点事業の広い施設内には、木でできたとても立派な子どもの遊びのスペースがありました。公園にあるような大きな木の遊具に驚きました。広場のスタッフの方に尋ねると、福島の子どもたちは、屋外で遊ばせることが以前出来なかったもので、そこに公的なお金をかけて、とても充実した屋内の遊び場が作られたということでした。

福島では、今もなお同じ家族の中でも放射能についての考えや意識は分かかれ、私が8年前に訪れた時にも同じ話を聞きました。長い年月の中で、放射能によるこれからの健康被害の不安や人と寸断されるような寂しさをどこかに抱えながら暮らす日々を想像するとその大変さに辛くなります。

フィールドワークで訪ねた、宝鏡寺境内にある「伝言館」には、原発事故を防げなかった悔恨・伝言の碑が建てられていました。伝言館でいただいた「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ 伝言館」という資料には、「伝言館」館長早川篤雄住職のメッセージが書いてありました。「伝言館は…『事態を侮らず、過度に恐れず、理性的に向き合う』姿勢を貫くように努めます。…愛とは、『他者の生きてありように自分も参加したいと願う心』だと思っています」とありました。この「他者の生きてありように自分も参加したいと願う心」は、震災プロジェクトに流れる精神にも、今私が取り組んでいる子育て支援にもつながって

いると思いました。

この資料によれば、1970年代から福島県浜通りの原発立地に反対する活動に取り組んでいた早川住職さんと、伝言館副館長で立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長の安齋育郎さん、原発反対の全国的活動で指導的な役割を果たしている伊東達也さんたちが、原発事故5週間目に、浜通りの放射線を調査されました。地上1mで50マイクロシーベルト/時の地点もあり、並々ならぬ原発事故が現実起こっていることを思い知らされた調査だったようです。安齋さんたちの「福島プロジェクト」は、依頼があれば個人宅でも訪問して、無償で放射線環境を調査し、どうすれば被曝を減らしてリスクを最小化できるかについて実践可能な具体的方法を提言するという地道な支援をされています。これこそ、住民が望んでいる大切な支援の一つではないだろうかと思いました。

村本先生が、著書『周辺からの記憶～3・11の証人となった十年～』の中でこのように書いておられます。「原発事故のことを早く過去のことにして消し去ってしまいたいという空気は、遠く関西にいても日々感じるものである。現地に行くと、たくさんの声なき声と辿り切れない複雑な力動を体感する。狂気の時代とそこに生き抜く人々の優しさと逞しさ。行ってみなければわからないことがたくさんある。」

昨年コロナ禍で行けなかった分、今年現地に行き改めてそのことを強く感じました。今回、いわき湯本の老舗旅館古滝屋の16代目の里見喜生さんが案内してくださったフィールドワークは、大変勉強になりました。里見さんは、「原子力災害で今も苦しむ人がいるから、被災地の現実を伝えていく」と決め、被災地を案内するツアーでは4つの災害を経験したお話を伝え、旅館の部屋に置いている冊子でも、特別な思いを書いておられます。

白河市には、「高校生が自由に使える放課後カフェ EMANON」という素敵な場あり、ゆったりコーヒーをいただきました。高校生から地域を愛する思いを育てる白河にとっても魅力を感じました。震災プロジェクトのプログラムをお手伝いしてくださった高校生の皆さんは、はきはきとコミュニケーションをとり、パワフルに動き、こちらも元気をいただきました。若い人たちの力は無限に広がります。今後この経験が種となり、どのように育って行くのか楽しみです。

原発事故が起こったとき、私は中学校で教員をしていました。そして、どうしたらこの福島の震災を中学生たちと一緒に考えられるのだろうと模索していました。震災の年の秋に、福島で被災されたある方から、その時の様子や思いを詳しく聞ける機会があって、聞き取りをしてその話を教材化しました。その方が話された中で、「放射能が怖い」、「忘れないでほしい」その言葉は今も私の心に残っています。中学生と一緒に勉強し考え、約200人の中学生から、学びに協力してくださったその方へお礼のメッセージを送りました。現地の公民館に置いてみんなで読んでくださったということです。あの時の中学生たちは、もう成人になりそれぞれの道を歩んでいます。あの時、遠く関西の奈良の地にて、無力さを感じていました。あれから11年が経ち、大きなことはできませんが、少しずつ自分の出来ることは変わってきています。

この秋、突然聞いた飯館村の長谷川さんの悲しい訃報。土地をこよなく愛し、被災者として行動を起こし、多くの種をまかれた、その長谷川さんが、2年前話してくださった「(理不尽さ、腹立たしさ、虚しさの中でも) やっぱりやらないとだめ」という言葉を思い出します。

これからも、その時その時に出来ることを自分なりに地道にやっていきたいと思います。

